

研究会合報告 - 2015 - 2016年度

雑誌名	アジア文化研究所研究年報
号	51
ページ	442-453
発行年	2017-02-28
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00010895/



研究会合報告——二〇一五年度～二〇一六年度

〈年次集会〉

第一〇回年次集会

日時 二〇一六年一月二三日(土)

会場 東洋大学白山キャンパス二号館一六階スカイホール中央

開会の挨拶

アジア文化研究所所長 松本 誠一

テーマ発表

「ネパール地震の復興を考える―インド西部地震の復興プロセスを参考にして―」

司会

研究員 子島 進

「インド西部地震(二〇〇一年)」

国立民族学博物館研究員 金谷 美和

ディスカッション

研究員 バイラ プラサド ビレンドラ

研究員 金田 英子

第一〇回年次集会では、金谷美和氏(国立民族学博物館)が、標記の基調報告を行った。二〇〇一年に発生した大地震は、金谷氏の調査地であるグジャラート州カッチ県を襲い、二万人を超える死者が出た。その復興過

程に関して、伝統工芸生産者の被災と新村の建設にフォーカスを当て、住民主導の復興を可能にした条件を金谷氏は列挙した。

- ・同一コミュニティ(カースト、生業、宗教)である
- ・解決すべき課題に即した援助をリクエストできた
- ・NGOと被災者の間に手工芸開発をとおして、震災前からの関係があった
- ・リーダーシップとマネジメントの的確さ
- ・問題が発生するごとに、相談、支援、解決を繰り返していった

金谷氏は、二〇〇一年から二〇一五年の一四年間、毎年二〇日～六〇日をかけて現地調査を継続してきた。文化人類学的研究の積み重ねに基づいた、きわめて貴重な報告であった。

本研究所の所員である金田英子氏(法学部)、ならびにビレンドラ氏(文学部)が、ネパールの現状を踏ま



報告風景



会場風景



金谷美和氏

えつつ、報告についてコメントした。なお、子島（国際地域学部）が進行役を務めた。これら三名は、それぞれネパール復興支援に関わる所員である。インドでの効果的な復興支援の事例から、ネパールに關しても中長期的な視点から考えていくことの重要性を確認することができた。（子島 進）

院生・客員研究員発表

「南路電線をめぐる朝鮮の外交」

「台湾における行政院直轄市の変遷」

「伝えられた「情報」——墓誌史料に見る中国唐代の情報伝達——」

「新仏教徒能海寛と中乗の世界」

「言語伝達速度と文化・社会的インプリケーション」

「インドネシアにおける学校教育と災害からのレジリエンス（自己回復力）に関する考察」

客員研究員 中田 有紀

記念発表

「国号〈隋〉字研究余滴」

研究員 高橋 継男

研究会合報告



会場風景



高橋継男研究員

院生研究員 中村 祐也

客員研究員 山形 勝義

客員研究員 竹内 洋介

客員研究員 飯塚 勝重

閉会の挨拶

〈研究会〉

第八回島カフエ

日時 二〇一六年五月一四日（土）

会場 東洋大学白山キャンパス六号館二階 六二一三教室

主催 島嶼コミュニティ学会

共催 東洋大学アジア文化研究所

「外国につながる人びとのコミュニティ——生きるための工夫」が示唆するもの——」

大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター客員研究員 武田 里子



報告風景



ご退職される高橋継男元所長を囲んで

研究員 後藤 武秀

研究会合報告

研究会…大型研究

アジア文化研究所「国境をまたぐ生活スタイル」企画 国際結婚移住に関する研究会

日時 二〇一六年五月二日(土)

会場 東洋大学白山キャンパス六号館四階六四〇二教室

「『グローバル・ファミリー』の出現とゆくえー近代国民国家とグローバル社会をつなぐ家族のあり方」へグローバル化による近代国民国家の枠組みを超えた新しい家族の形」とは？

開内 文乃



開内文乃氏



会場風景

研究会…大型研究

アジア家族・世帯統計研究会

日時 二〇一六年六月二四日(金)

会場 東洋大学白山キャンパス六号館四階六四〇二教室

司会

東洋大学社会学部教授 西野 理子

「『国境をまたぐ繋がり』調査の新展開にむけて」 研究員 松本 誠一

「アジアにおける国境をまたぐ家族生活の実態調査案」

研究支援者 梁 凌詩 ナンシー



松本誠一氏



梁 凌詩 ナンシー 研究支援者

島嶼コミュニティ学会 第六回年会

日時 二〇一六年六月二十五日(土)

会場 東洋大学白山キャンパス六号館二階 六二一九教室

主催 島嶼コミュニティ学会

後援 東洋大学アジア文化研究所

「しま」と若者―人口減少時代の夢と選択―

基調講演

「日本の離島の現状とこれからの離島振興策」

日本離島センター専務理事 小島 愛之助

自由発表

「済州島から「猪飼野」へ―コリアンタウンとして発展する大阪市生野区

御幸通商店街の事例」 法政大学沖縄文化研究所 堀本 雅章

「日蓮宗不受不施派と地域社会―房総地方における動向から」

千葉県文書館 内藤 幹生

「香港における越境出産―地域的要因から」

共立女子大学・東海大学 愛 みち子

「離島における高等教育―地域志向型教育を経験した理系高専の経験について」 広島高等商船専門学校 田上 敦士

「離島漁業の振興にむけた水産物流通改善の取り組み―鹿児島県十島村を事例に―」 鹿児島大学水産学部 鳥居 享司

研究会合報告

研究会・研究所プロジェクト(代表者 長津一史)

「東南アジア島嶼部における国境管理レジームと境域社会の変容」研究会

日時 二〇一六年七月三日(日)

会場 東洋大学白山キャンパス八号館五階セミナー室5

主催 科学研究費助成事業基盤研究B(代表 長津一史)

共催 東洋大学アジア文化研究所

趣旨説明

研究員 長津 一史

「フィリピン・ダバオ市境域調査の報告・今年度の計画」

東京大学東洋文化研究所准教授 青山 和佳

「インドネシア・リアウ州境域調査の報告・今年度の計画」

客員研究員 加藤 剛

「東ティモール境域調査の報告・今年度の計画」

上智大学総合グローバル学部准教授 福武 慎太郎

「マレーシア・サバ州境域調査の報告・今年度の計画」

首都大学東京人文科学研究科教授 伊藤 眞

「インドネシア国境管理調査の報告・今年度の計画」

立命館大学国際関係学部教授 本名 純

「マレーシア国境管理調査の報告・今年度の計画」

東京外国語大学総合国際学研究院准教授 左右田 直規

総合討論

Dr.Fumiko Ikawa-Smith (井川史子) マギル大学名誉教授 (人類学・考古学) を迎えて「縄文丸木舟を見、語る会」

日時 二〇一六年九月七日(水)

会場 東洋大学白山キャンパス五号館地下一階五B 一教室 (博物館実習室)

共催 井上円了記念博物館・東洋大学アジア文化研究所

二〇一六年八月二十八日から九月二日までにわたり第八回世界考古学会議京都大会が開催された。そこに参加するため、カナダからFumiko Ikawa-Smith (井川史子) 先生が来日された。この大会はアジアでは初めて開かれ、大規模な集まりであった。井川先生は、夫君のPhilip Smith博士と共に、旧石器文化を専門とする考古学・人類学者であられる。Science : Current Anthropology : World Archaeology : The Journal of Asian Studies等々、英語、仏語の学術誌において、多年にわたり、東アジア、日本の考古学研究動向を紹介してこられた。

井川先生から、その世界考古学会京都会議が終わってから東京に來られるというご連絡をいただいた。そこで、東洋大学井上円了記念博物館収蔵庫で保管している縄文丸木舟をご覧になるかと伺ったところ、ご覧になりたいとお返事をいただいた。博物館の森公章館長、北田健二学芸員に相談して、賛同をいただき、後述のような専門家に集まっていたく機会を設けた。

この丸木舟は完形をとどめてはいないが、日本の考古学史上、特異な位

置づけを与えられる重要なものと評される。残念なことに博物館スペースの制約で常設展示されておらず、普段は観覧する機会がない。そこで、会合の名称を「縄文丸木舟を見、語る会」として、次のような呼び掛け文を起こして、先着一〇名限定とし、公私立博物館学芸員・友の会会員、縄文文化研究者を主な対象として参加を勧誘した。

呼びかけ文

関心ある方々に、共に縄文丸木舟に関して親しく語り合う集いをご案内します。つきましては、会場の都合上、下記のとおり、参加者数を限定させていただきます。

井川先生は、津田塾大学を卒業され、東京都立大学大学院に開設されたばかりの社会人類学課程で、後に学会の中樞を担う方々と交流され、一九五〇年代半ばに、アメリカに留学。一九六八年からカナダ・モントリオールのMcGill (マギル) 大学に在籍し、一九七四年にはハーバード大学から人類学でPhDを授与された。日本考古学を国際化し、東アジア考古学を国際舞台で発展させる先頭に立ってこられました。この間、マギル大学副学長、東アジア考古学会会長、カナダ日本学会会長等々の要職も歴任され、日本・カナダ学術交流へのご貢献により、皇居で叙勲されています。

東洋大学の丸木舟は、一九四七(昭和二二)年に千葉県検見川で草炭採掘の作業中に丸木舟が出土したのを契機に、慶應義塾大学・東洋大学・日本考古学研究所が一九四九年までの間、発掘調査を続けました。そのとき発見された丸木舟の一艘が東洋大学博物館に保管されています。一九五一(昭和二六)年に同地から「大賀ハスの種子」が発見されました。この、

検見川での縄文丸木舟発見の経緯については、高橋統一「縄文丸木舟覚え書——房総の諸事例から」（東洋大学アジア文化研究所『研究年報』第三九号＝二〇〇五年、四〇号＝二〇〇六年）に詳しく記されています。

【参加者】（敬称略 ABC順）

土肥 孝（どい たかし）

元文化庁調査官・東洋大学非常勤講師

平田 孝弘（ひらた たかひろ）

上田墨縄堂 東洋大学の丸木舟保存処理

井川 史子（Fumiko Ika wa Smith）（いかわ ふみこ）

マギル（McGill）大学名誉教授 元東アジア考古学会会長〔二〇〇四

～二〇一二年〕元カナダ日本学会会長

菊池 徹夫（きくち てつお）

早稲田大学名誉教授、日本考古学会前会長 「北海道・北日本の縄文

遺跡を世界遺産にする委員会」会長

領塚 正浩（りょうづか まさひろ）

市立市川考古博物館・学芸員

検見川での丸木舟発見に関わった日本考古学研究所に関する研究。

市川市からは二〇一四年に七五〇〇年前の丸木舟が発見されている。

佐藤 洋（さとう よう）

千葉市立加曾利貝塚博物館学芸員

竹内 海四郎（たけうち かいしろう）

鳥嶼コミュニティ学会会員、武道研究家 武道劇画原作者

研究会合報告

【主催者側】

森 公章（もり きみゆき）

東洋大学井上円了記念博物館館長 文学部史学科教授 日本古代史

北田 健二（きただ けんじ）

東洋大学井上円了記念博物館学芸員 民俗学・博物館学

松本 誠一（まつもと せいいち）

東洋大学アジア文化研究所・所長 社会学部社会文化システム学科教授

竹内 洋介（たけうち ようすけ）

東洋大学アジア文化研究所・客員研究員、中国史

以下に会の冒頭部分をまとめている。

松本の開会挨拶では、この会の趣旨説明を述べ、井川先生と東洋大学の縄文丸木舟の経緯を調べた故高橋統一名誉教授とは都立大学時代からの友人であることを紹介した。一九九五年度の松本の海外長期研究にあたり、高橋先生の紹介を経て、当時副学長の井川先生のお世話で、マギル大学東アジア研究センターに迎えていただいた。

森公章館長から、検見川で発見された縄文丸木舟が東洋大学に来るようになった経緯については高橋先生の論文が詳しいと簡潔に説明され、これからの保管方法について参加者からの提言を期待する旨が述べられた。

井川先生から、世界における日本・縄文文化研究の動向を追う場合に注目対象とする学会・研究者が紹介された。以下はその要約である。



東洋大学「縄文丸木舟と見、語る会」参加者 前列左から領塚、井川、土肥、松本、竹内（海）
後列左から佐藤、平田、北田

京都で開催された第八回世界考古学会議は、八六か国から一八〇〇名が参加し、発表件数は一五〇〇、ポスター発表は一四〇と大規模であった。日本での開催であったので、日本からの参加者も多かった。前回四年前はヨルダンで、次回四年後はプラハで開催される。

この次にグローバルな学会は、東アジア考古学会で、最近、四年ごとの開催が二年ごとへと期間が狭められた。初回は一九九六年にホノルルで、第二回はダラム（イギリス）、第三回（二〇〇四）はテジョン（韓国）、第四回（二〇〇八）は北京、第五回（二〇一二）は福岡、第六回（二〇一四）はウランバートル、第七回

（二〇一六）はポストン大学・ハーバード大学。今年の参加者数は三六〇名、発表件数は二五〇件。このうち日本関係が三四件、縄文関係は六件あった。日本からの参加者はあまり多くなく、中国からの参加者がとても多い。

もう一つのグローバルな学会は、Indo-Pacific Prehistory Association (IPPA) で、アイビーピーエーとか、 IPPとか呼んでいる。前身は一九二九年からで、現在とは別名称のFar-Eastern Prehistory Associationと称していた。Far-easternの語は使用が避けられるようになり、改称された。会員数は六〇〇名で、インド半島、オセアニア、メラネシアの三六か国から参加しており、事務局は長らく国立オーストラリア大学にある。最近は二〇一四年にカンボジアで大会が開催され、一〇〇〇名の参加があった。

アメリカ考古学会も参加者数千人で規模が大きく、日本関係のセッションは毎年一〜三ある。日本からは一〇〜二〇名くらいが参加する。ここも中国からの参加が非常に増えている。英語名称は「アメリカ考古学のための学会」であるが、実際には「考古学全般に対するアメリカの集まり」となっている。

カナダアジア学会はインド系の方が活発に運営している。アジア関係の学会はいくつかあり、そこに考古学者も所属している場合がある。カナダの研究者はアメリカの学会にも所属するようになる。

一九八七年にカナダ日本学会第一回大会をモントリオールで開催した。それ以後、毎年開催されている。一九八〇年代は日本経済に関心が集まり、経済学者が活発だった。後に日本語教育者が活発になった。日本語を教えるときには、日本の社会にも触れるようになり、専攻分野が広くなる。会

員数は約一三〇人。二〇一五年の大会参加者は五七名と少なく、セッションは二つくらいで全員、話ができる状態だった。

ここに所属する考古学者は少ない。リチャード・ピアソンがブリティッシュ・コロンビアにいて、井川がモントリオールにいて、二人とも引退してはいるが、何かしている。トロントにいたビル・ハーレーと、オタワにいた二人は亡くなった。現役ではトロント大学のギャリー・クロフフォードがいる。

アメリカではマギル大学で学位を取った羽生淳子 (Dr. Junko Habu) が二〇〇四年に『*Ancient Jomon of Japan* (Cambridge University Press)』を出版して、それがよく使われていると聞く。二〇〇五年に小林達雄がオックスフォードから『*Jomon Reflections: Forager Life and Culture in the Prehistoric Japanese Archipelago* (Oxbow Books Ltd. Simon Kaner と共著)』を出している。

縄文研究は、非常にコンプレックスな社会組織をもった狩猟採集民、hunter-gathererという見方で、例えばカリフォルニア、あるいはカナダの北西海岸の先住民などと対比して、ethnoarchaeologyのようになる。北米の場合は考古学は人類学の一部になるので、そういうアプローチの仕方になる。

羽生淳子が『*Seafaring and the Development of Cultural Complexity in Northeast Asia: Evidence from the Japanese Archipelago*』(2010, Global Origins and the Development of Seafaring, Cambridge: McDonald Institute Monograph) を著し、北東アジアの複雑な採集民のボートの使い方を論じていて、非常に面白い。

研究会合報告

神津島の黒曜石を入手するために縄文人は往復の航海をしたように、間接的な航海の証拠はおそらく日本が世界で一番古い。横須賀市夏島には縄文早期の遺跡があるが、明らかに海産物利用をしている。縄文早期に舟が出てくるが、大理石が出たり、遺跡が大規模化したたり、貯蔵庫もあったり、それ以前とは大きな変化があったことが認められる。舟の重要性は行動範囲が広がること、運べる量が増えたことや、ほかのグループとの交渉に用いられ、社会組織の在り方が変わることにつながる。縄文後期前には舟の使い方が広がるといいうこともあったようだ。



東洋大学「縄文丸木舟を見、語る会」風景

井川先生のお話の中で言及された羽生さんは、一九九五年にカリフォルニア州立大学バークレーの人類学科での公募に応募して、三桁の応募者の中から見事選ばれて、ポストを得た。マギルに居ながら私はその各段階の経緯を直接伺っていた。京都会議にも参加されたが、バークレーの授業開始に合わせて戻られるため、「見、語る会」には残念ながら参加されなかった。東洋大学に縄文丸木舟があることはご存知なかったとのこと、いざ見見ていただく機会があるだろう。総合地球環境学研究所の小規模経済プロジェクトリーダーを務めておられる。

井川先生のお話の後、北田学芸員から丸木舟の保管現況、平田さんから昨年の保存処理がどう行われたか、丸木舟の材質状態がどうなっている

研究会合報告

か、詳しい説明を受けた。丸木舟多数を見ている土肥さんから、この舟は底が丸く、使用痕が少ないこと、航海用よりは湿地帯での荷物運搬用であったろうことが語られた。このほか、丸木舟を囲みながら、参加者一人一人から談話が続いた。

(文責、松本誠一)

〈研究例会〉

平成二八年度第一回公開研究例会

「近代日本におけるイスラーム関係史資料データベース」

日時 二〇一六年八月二二日(月)

会場 東洋大学白山キャンパス六号館四階六四〇二教室

共催 東洋大学アジア文化研究所・研究所プロジェクト(代表 三沢伸生)・科学研究費助成事業基盤研究C(代表 三沢伸生)・「近代日本・イスラーム世界関係史」研究班

総合司会

問題提起 「研究および史資料の現状と問題」

客員研究員 石井 隆憲

「近代の神戸における事例から」

研究員 三沢 伸生

「近代の名古屋・中京地区における事例から」

客員研究員 福田 義昭

「近代の大阪における事例から」

客員研究員 吉田 達矢

「タタール・ディアスポラ研究と極東出身タタール移民二世の語り」

兵庫大学非常勤講師 親重 知左子

総合コメント

日本学術振興会特別研究員DC 沼田 彩誉子

質疑応答・討論

研究員 子島 進

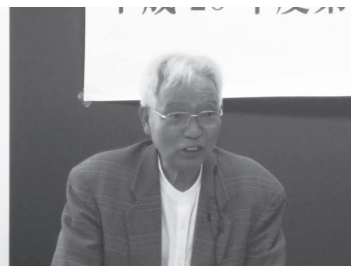
平成二八年度第二回公開研究例会 兼「東アジア地域における統合と交流」研究班例会

日時 二〇一六年一〇月八日(土)

会場 東洋大学白山キャンパス六号館四階六四〇二教室

「『平祥土州之印』をめぐる——中越関係史の一断面——」

客員研究員 谷口 房男



谷口房男客員研究員



集合写真

平成二八年度第三回公開研究例会 兼 研究所プロジェクト(代表者 井上貴也) 研究成果発表会

日時 二〇一六年一〇月一〇日(月)

会場 東洋大学白山キャンパス二号館一四階法学部学習指導室

「香港会社法におけるイギリス法と中華人民共和国法の影響」

客員研究員 朱 大明

平成二八年度第四回公開研究例会

日時 二〇一六年十一月一日(火)

会場 東洋大学白山キャンパス五号館
四階五四〇一教室

「中国伝統文化の保護及び開発―広西東興市万尾村の事例から」

客員研究員 廖 国一

中国のキン族はベトナムの海防(ハイフォン)付近の涂山から移動した民族である。万尾(万尾)に来てから、五〇〇年の歴史があると言われている。万尾村は孤島であり、周りは水に囲まれている、当時はベトナム領であった。中国とベトナムとの間で、国境地域の領土交換が行われて、現在は中国領になり、埋め立てられて陸地化している。

哈祭(はさい)はキン族のもっとも盛

研究会合報告



廖国一客員研究員と陳洋大学院生(通訳)



廖国一客員研究員

大な祭りであり、「唱哈祭」とも呼ばれている。歌垣との類似が注目される祭りである。キン族の哈祭は二〇〇六年に中国のレベルの高い国家無形文化遺産に登録されてから、政府に重視されるようになった。二〇〇八年にキン族哈祭は初めて民営から官営に変えられた。防城港市(東興市と他の区・県を含む)の重要な祭りとなった。哈祭を中心に、キン族のグローバル化、民間交流活動が進められた。政府主導の哈祭は、村人の願いとギャップがあり、商業的な雰囲気濃厚である。

当日は多数の写真で最近の哈祭の様子が紹介された。多数の人々を集める。ベトナム国境に近い土地でのベトナム由来の民俗行事、観光資源として注目される。

ワークショップ

日時 二〇一六年九月二日(金)

会場 韓国ソウル駅会議室 A R E X II

午餐 ソウル駅内 명가의 뜰 (名家の庭)

共催 韓国法制研究院較法制研究室制交流支援チーム

東洋大学アジア文化研究所

「アジア地域外国人労働者関連法制分析」

「研究概要およびワークショップの開催目的・紹介」

韓国法制研究院副研究委員 チェ・チヨン

研究会合報告

歓迎の挨拶

韓国法制研究院研究委員 朴 鎭棟

一二月三日

お礼の挨拶

研究員 後藤 武秀

趣旨説明

研究員 植野 弘子

「韓国の外国人労働者関連法制の動向」

韓国法制研究院研究委員 朴 鎭棟

「鹿野忠雄の学問の展開過程から学ぶ「移動」と帝国日本…台湾から東南アジアまで」 中国 貴州大学・韓国 ソウル大学名誉教授 全 京秀

「外国人の韓国労働法上の保護」

SCI 社会資本研究院博士 キム・ヨンミ

「日式表札の成立と越境―旧日本植民地における持続と変容を中心に―」

「女性外国人労働者に適用される韓国法の分析と限界」

梨花女子大学校法科専門大学院教授 朴 貴千

コメンテーター 元興寺文化財研究所 角南 聡一郎 日本女子大学 西村 一之

「マレーシアの外国人労働者関連法制」

韓国法制研究院副研究委員 チェ・チヨン

「消え去ろうとしない帝国日本の「影」―沖縄のパイナップル生産にみる人とモノの移動を中心に―」 神奈川大学 八尾 祥平

総合討論

研究員 吉川 美華 研究員 後藤 武秀

コメンテーター 「戦前・戦後期にみられた東アジアにおける「中華」の拡散―日韓両地域での粉食定着を中心に―」 高知県立大学 飯高 伸五

韓国法制研究院研究委員 朴 鎭棟

コメンテーター 神田外語大学 林 史樹

韓国法制研究院副研究委員 洪 性珉

コメンテーター 県立広島大学 上水流 久彦

〈シンポジウム〉

公開シンポジウム

「帝国日本における人とモノの移動と他者像―台湾・朝鮮・沖縄を基点に―」

「韓国華僑の台湾の大学への進学」 台湾 淡江大学 富田 哲 韓国 仁川大学 宋 承錫

日時 二〇一六年十二月三日(土)・四日(日)

会場 東洋大学白山キャンパス八号館七階一二五記念ホール

主催 科学研究費助成事業基盤研究A (代表 植野弘子)

後援 東洋大学アジア文化研究所

「国際交流事業における在日コリアンの参与―対馬と下関の朝鮮通信使行列再現を中心に―」 韓国 啓明大学 中村 八重 佛教大学 鈴木 文子

「沖縄県宮古地方の台湾系住民をめぐる植民地期から現在までの記憶の断裂と散在―八重山地方との比較にその遠因を探る―」

ジャーナリスト 松田 良孝

コメンテーター

慶應義塾大学 三尾 裕子

「帝国における人とモノの移動に関する統制管理の窓口―日本統治期台湾の税関―」

台湾中央研究院台湾史研究所 林 玉茹

コメンテーター

専修大学 谷ヶ城 秀吉

総合討論

京都大学 田中 雅一

東亜大学 崔 吉城

専修大学 谷ヶ城 秀吉

司会

研究員 植野 弘子